

特	別	支	援	教	育	の
				い	ま	①

「ケアの時代」 の特別支援教育

「ケアの時代」

「2000年代が『高齢者』の時代であったとするならば、2010年代は『子ども』の時代である。」これはかつて筆者が行ったインタビュー調査のなかで、ある医学研究者が語ったことである。確かに、2000年には介護保険制度が誕生し、「高齢者介護」「認知症」「老々介護」「孤独死」「おひとりさま」「終活」などの言葉が立て続けに登場し、大きな社会的争点となった。

竹内慶至

(名古屋外国語大学
現代国際学部准教授)



2010年代になっても、そのような言説は相変わらずメディアにあふれていたが、それらと並行して今度は「育児」「子どもの貧困」「発達障害」、特に最近では「幼児教育無償化」などの「子ども」に関する社会的争点を取り上げられるようになってきた。

このような認識は大まかには間違っていないだろう。だが、筆者は「高齢者」と「子ども」だけでなく、そこに「障害者」ということも加えて（さらに「女性」を加える

こともできる）、2000年代からのこの20年間で「ケアの時代」ととらえることができると考えている。

「ケアの時代」とは、高齢者、子ども、障害者など、これまで「社会的弱者」ととらえられてきた人々に大きな社会的関心が寄せられるだけでなく、逆に「社会的弱者」と呼ばれてきた人々が社会に大きくアピールすることが可能になった時代である。「当事者主権」や「エンパワーメント」「ニーズ」などの言葉がクローズアップされるようになってきたことは、その傍証である。

かつて「当たり前」であった、「医者」や「親」「教師」らが指示をして、「高齢者（患者）」「子ども」「障害者」はそれに従うというあり方に対して、疑義が突きつけられるようになってきた。その結果として、医者や教師など「ケアする側」ではなく、高齢者や障害者などの「ケアされる側」の「能动性」に着目することの重要性が認識されるようになった。

つまり、権力を持つ側（＝「ケアする